

興福寺東金堂院の調査(平城第640次南区)

2021年10月、にぎわいをとりもどした興福寺五重塔の南東で、かつての興福寺南面の区画施設の規模や構造に迫るための調査をおこないました。興福寺南面は、現在は石垣の上に木製の柵がめぐりますが、絵図や古写真では築地塀(瓦葺屋根をもつ土塀)がみえ、2020年度の調査でもその痕跡を確認しています。

調査を始めてすぐ、地表下30～40cmで、東西方向にのびる硬くしまった土の高まりを検出しました。この高まりを断割調査したところ、奈良時代の築地塀の積土と、後世に積みたした土とわかりました。また掘立柱の柱穴もみつかりました。築地塀の屋根を支えるための寄柱を立てた穴と思われます。築地塀本体の南端は調査区外にあるため規模は確定できませんが、現在の石垣上端を築地塀の南端と仮定すると、築地塀の下部幅は約2.7～3.0m(9～10尺)に復元できます。これは平城宮の外周の築地塀とほぼ同規模で、奈良時代の興福寺の壮麗さをうかがわせます。

また、高まりに掘られた柱穴や溝、礎石等も確認しました。これらは改修にともなうものとみられます。南面築地塀は、奈良時代の創建以後、数度の改修を受けながら位置を保ち続けたようです。

築地塀の北側からは、大量の瓦片、炭片等が出土しました。治承4年(1180)の南都焼討をはじめとする数度の興福寺堂塔の被災に関わるものとみられます。東西3m×南北4mの小規模な調査区でしたが、興福寺の激動の歴史を感じられる成果をあげることができました。

(都城発掘調査部 西田 紀子)



南面築地塀の高まりと柱穴(北西から)